

ボストン大学公衆衛生大学院留学報告書

2017-2018年度グローバル補助金奨学生 舟越 優



- 留学先 ボストン大学公衆衛生大学院修士課程
- スポンサークラブ
東京立川こぶしロータリークラブ
- ホストクラブ Salem Rotary Club



感謝祭

1. 履修内容, 学校生活の報告

中間試験が終わったのがつい先日のようですが, 早くも学期末のレポートや最終プレゼンテーションの締切が近づいてきており, その後には期末試験が控えています. これが終われば, 年末年始の休暇に入り一息つけま

ご厚意で感謝祭のディナーにご招待いただき, 七面鳥をはじめとした伝統的な料理をいただきました.

すので、引き続き体調管理に留意しつつ学習に励んでまいろうと思います。

今回は4つの必修科目の中からPH718

Leadership and Management for Public Healthについて、どのような授業で、どのようなことを学んだかの一部をご紹介します。この授業はその名の通り、公衆衛生の分野でプロフェッショナルとして仕事をしていく上で必要なリーダーシップおよびマネジメントについて学ぶというものです。以前にも少しご説明しましたが、公衆衛生という分野は課題が多様な分野に跨がる複雑なものであること、基本的にチームで課題解決を行うことが基本と考えられています。はじめは一体どのようなことを勉強するのだろう、リーダーシップの授業など受けたことがないが本当に役立つ内容なのだろうか、率直に言って半信半疑でしたが、自分自身の文化や性格を含めたバックグラウンドを見つめ直し、また今後身につける必要がある考え方や行動規範などさまざまなことを考える非常に良い機会となりました。具体的に授業で取り上げた項目は非常に多岐にわたりますが、例をあげますと公衆衛生の分野がどのように変化しておりその結果将来どのようなスキルが必要と予想されるか、振り返り（自己省察）の重要性と方法、バイアスとステレオタイプが人びとのコミュニケーションに果たす役割、チームワークを効果的なものにするために必要なこと、プレゼンテーションの技法、的確なフィードバックを授受するための考え方と具体的な方法、プロジェクト管理と予算、公衆衛生のステークホルダーに対するSWOT分析、MBTI (Myers-Briggs Type Indicator)による個人の性格分析などがあります。

またこれらの概念や手法を文献で学び、授業で議論することと並行して、チームプロジェクトも学期を通して進めており、つい先日最終プレゼンテーションをおこないました。5-6人のチームに分かれ、実際に公衆衛生の課題に取り組んでいる団体から依頼を受けたコンサルティングチームになったと仮定して、予算確保のためのキャンペーンやアドボカシー活動を立案、計画書作成、予算を握るステークホルダーを前にしたプレゼンテーションを行うというものです。私たちのチームではマサチューセッツ州でreproduction rights, 周産期医療に関わる活動を長年行っている



ケンブリッジハーフマ
ラソンの後に、一緒に参
加した大学院の同級生
と。

Planned Parenthood League of Massachusettsのメンバーとして、クッキーとTシャツの販売で資金を募るプロジェクトを立案しました。実在する団体に関する資料を収集し、授業で学んだSWOT分析やガanttチャートといったビジネスの手法を適用する作業はなれない点も多く苦労しましたが、学んだ概念を定着させる上で大変役立ちましたし、臨床医の仕事はコストを意識する場面がどうしても他の分野と比較すると少ないことを以前より感じていましたので、そういった点でも良い経験となりました。またチームワークという点では、ミーティングへの参加の仕方一つとってもさまざまなアメリカ人や他国からの留学生との共同作業は相手の考えを押し量るところから難しく、ときには気疲れもしつつ、こちらも充実した学びとなりました。

またこの授業を通して繰り返し強調されたのが、self-awareness, すなわち自己認識の重要性です。自己認識は言うは易く行うは難しで、自らを客観視することは非常に難しい週間です。さまざまな研究で、多くの人は自分自身の能力や成果を不当に高く評価しがちであり、自らが持っている前提にしばしば無自覚であることが知られています。このような誤った自己評価や暗黙の了解は他者への無理解や差別などとも結びつくことがあります。公衆衛生の世界でリーダーシップを発揮するためには、自らの行動や思考のパターン、そして得意なことと苦手なことを知り、振り返ることが重要とのことでした。すぐに身につくスキルというわけではありませんが、今後も忘れずに、何度も立ち返りたい観点を得られました。



Museum of Fine Arts, Bostonは浮世絵をはじめとした日本画のコレクションが大変有名です。現在は村上隆氏のエキシビジョンが評判をよんでいます。

日常生活では、前回もご紹介したボストンシンフォニーオーケストラのコンサートやMuseum of Fine Arts, Bostonなどの美術館での美術鑑賞を引き続き楽しみつつ、ニューヨークから訪れた友人とユニオンオイスターハウス（ケネディ大統領が会いしたお店として知られており、我々の席はケネディ大統領が常用していたブースの隣でした）でクラムチャウダーに舌鼓をうったりと、授業の合間をぬってボストンでの生活も楽しんでいます。また、11月第四木曜日の感謝祭は日本のお正月に類するイベントとして、米国では家族が集って七面鳥を食べるとするのが恒例なのですが、ご縁があつてあるアメリカ人のご家庭での晚餐に招待していただきました。海外生活の経験も豊富なご夫婦でしたので、米国人からみたヨーロッパ、感謝祭の歴史など非常に興味深い話を多く聞かせていただきました。将来は、自分もその時自分がある場所で、このようなもてなしを他者へ提供したいと思わされる素晴らしい時間でした。

2. ロータリアンとの関わりについて

ホストクラブの方とも日程調整を行っているのですが、例会が開かれている火曜日が毎週授業であり、私の期末試験が行われる19日がクラブの例会も年内は最後とのことで残念ながら年内は訪問が実現できませんでした。年内には春学期の日程が決定しますので、確定次第セーラムへの訪問を調整していければと考えております。

3. 重点分野に関して感じたこと、履修内容との接点

ボストン大学では2015年に就任した、全米で最も若い学部長であるDean Galeaのもと、教育プログラムの改革に取り組んでおり、その一環としてすべての修士課程に在籍する学生が各自の専攻によらずこれまでご紹介している4つの必修科目（Integrated Core Courses）に取り組んでいます。これにより今後学ぶ科目が私のように疫学や統計学のような基礎的な内容に重きをおいている学生と、ヘルスマネジメントやコミュニティアセスメントとのような応用を重視する科目を履修していく学生とがともに学び合う機会が生まれており、大変有意義だと感じています。先日、4つの必修科目が実際の公衆衛生上の課題にどのように応用されるのかを学ぶIntegrating Integrated Core（あえて日本語に訳せば”統合的な基礎を統合する”となるでしょうか）という学期の総まとめに当たる内容の授業があり、取り上げられたテーマは米国における妊産婦死亡の現状でした。これまで学んできたデータ分析や、システム思考、法律や医療制度、そして健康の社会的決定要因となっている歴史的背景や社会構造の知識をもとに、妊産婦死亡という複雑な課題をどのように分析し、いかに解決の糸口を探るかをレクチャー、ディスカッションをもとに学ぶ大変充実したものでした。これまでのよい復習になるとともに、今後さらに学ぶことが多くあることを再確認しました。こちらについてもまた改めてご紹介できればと考えています。

ボストンでは感謝祭も終わり街ではクリスマスの飾り付けもみられるようになってきました。これからしばらくは慌ただしい日々が続きます。良い形で最初の学期を終われるよう、体調管理や休養にも気を配りつつ過ごしてまいります。東京もすっかり寒くなってきたと聞いております。皆様もどうぞご自愛ください。それでは次回は12月にご報告を差し上げます。